

間もなく迎える四月八日は「釈尊降誕会」といい、お釈迦さまの誕生の日とされています。各地のお寺ではお釈迦さまの誕生の姿を模した誕生仏を、季節の花で飾った「花御堂」に安置して、甘茶をかけてお祝いをします。また、その時期が関東まで桜が咲く季節であることから「花まつり」の別名で親しまれています。

お釈迦さまの父はヒマラヤ山脈の山麓地帯にあった釈迦国の国王であるスドーダナ、お母さまはマーヤーと申します。

ある夜、マーヤーは六本の牙をもつ白い象が、自分の体の中に入ってゆくという不思議な夢を見てお釈迦さまをみごもります。

その後、出産の時期が近づいて、コーリヤ国に里帰りをするのですが、その途中、ルンビニーという名の花園で休息をとった際ににわかに陣痛が始まりお釈迦さまを産み落とします。

生まれるとすぐにお釈迦さまは北に向かって七歩歩んで、
「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげ ゆいがどくそん）
天の上にも天の下にもただ我のみ尊い」と言葉を発したと伝えられています。

これらの不思議な話は、後に加えられたと考えられますが、多くの皆さまのお釈迦さまを慕っていた想いが感じられるものです。

お釈迦さまに直接お会いした事のない方も、その教えに惹かれてお釈迦さまのイメージを膨らませていったのでしょうか。

特にこの「天の上にも天の下にもただ我のみ尊い」という言葉ですが、普通に聞くと産まれてすぐに「我のみ尊い」など、あまりにも偉そうに思えるかもしれません。しかし、お釈迦さまを慕う皆さまの思いが表れた言葉と考えると、「信仰の力」というものを感じずにはられません。

様々な不思議なお話がありますが、お釈迦さまは実際に八十歳まで生きた実存の方です。その足跡とその生き方とそのみ教えに学ぶのが仏教徒です。

そんな我々がこの誕生の際の「我のみ尊い」という言葉に学ぶ事は、同じように我々も尊い命を持っているという事なのではないでしょうか。それぞれが尊い命

を持っているという事は、自分を大切にすると同じように他者も大切にす、他者を認めるという生き方に繋がるものなのです。

— 終 —